

# 梅堯臣の後半生の交友詩

——裴煜と宋敏修について——

坂井 多穂子

梅堯臣の友人といえは、親友の歐陽脩や蘇舜欽が知られているが、本論では、「晩に得たり 二友生」<sup>(1)</sup>、梅堯臣が年をとってからの友人裴煜（字は如晦）と宋敏修（字は中道）、この二人との交友に焦点をあててみたい。「性僻 交游 寡し」<sup>(2)</sup>、じぶんは非社交的な性格であると梅堯臣はいうが、梅堯臣の後半生を考える場合、彼らとの交友を抜きにすることはできない。朱東潤氏の『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社）は梅堯臣三〇歳から五九歳までの作品を編年に並べているが、それに拠れば、裴煜の名が初めて梅堯臣の詩にあらわれるのは卷二二、慶曆二（一〇四二）年、梅堯臣四一歳の時である。その後、生涯をつうじて交友があり、二九首の詩に裴煜の名がみえる。いっぽう、宋敏修の名があらわれるのは裴煜に遅れること三年の慶曆五（一〇四五）年、梅堯臣四四歳（卷一五）のときであり、三五首の詩にその名がみえ、やはり生涯を通じて交友が続いた。

劉守宜氏の『梅堯臣詩之研究及其年譜』（文史哲出版社）には、梅堯臣の友人（外戚以外）を、

(一) 歐陽脩と河内の友人たち

(二) 交友の密な者

(三) 交友の疏な者

(四) 僧侶

の四つに分類している。(一)は、梅堯臣が河南縣主簿として洛陽にいた天聖九(一〇三二)年、三〇歳當時にすでに親交のあつた相手であり、いわば青春時代をもにした相手である。歐陽脩のように生涯をつうじて交友のあつた者のほかに、錢惟演(一〇三四年卒)・尹源(一〇四五年卒)・尹洙(一〇四七年卒)のように相手の死によって交友が途絶えたケースもある。劉守直氏は、裴煜を「(二)交友の密な者」の、范仲淹に次ぐ二番目に、また、宋敏修の名を同じく四番目(兄の宋敏求が三番目)に挙げている。范仲淹の名は梅堯臣三三歳の詩にすでにみえるもののちに疎遠になり、皇祐四(一〇五二)年の范仲淹の死によってその交友は終わりを告げた。范仲淹に宛てた十首に満たぬ作品数にくらべれば、裴煜と宋敏修への詩はそれぞれその三倍の量をほこる。

しかも、梅堯臣はしばしばこの二人を「裴宋」と併記している。とりたてて有名ではないこの二人を並称するのは一般的ではない。たとえば歐陽脩が裴煜と与えた書簡には梅堯臣の名はみえるが宋敏修には触れていない<sup>3)</sup>。本論では、交友の時期の重なりと作品数という理由のみによって、この二人をとりあげるわけではない。梅堯臣がしばしばこの二人を併記しているからである。はじめて二人を併記したのは皇祐三(一〇五二)年、梅堯臣五十歳の作品、「依韻解中道如晦調」詩と「月下懷裴如晦宋中道」詩であり、「吾が交に裴宋有り」とうたう。またその五年後の「送宋中道大博倅廣平」詩においては宋敏修への送別詩であるのに「晩に得たり二友生」と詠い、その原注に「裴如晦時に亦呉江に宰たり」とその場にいない裴煜にも想いを馳せている。また、後述するように、梅堯臣はときに友人を「夢」に見、目覚めてから詩を作っているが、裴煜と宋敏修についても夢が覚めてからそれぞれに詩をおくつていゝ。夢を見て詩を作るのは梅堯臣に始まったわけではなく、李白や白居易、李商隱など、唐の詩人にも多くみられる。

夢の詩全般については稿を改めて考えることにするが、梅堯臣の場合、友人や故人に会っている場面が多く、相手からの手紙を受け取る予兆として夢を見ている。もともとこれは梅堯臣に限ったことではない。本論では裴・宋との交友の始まり、そして彼らを夢にみた詩や併記した詩を通じてその親密の度合を窺うことにする。

## 一 交友の始まり

裴煜が梅堯臣の作品に初めて登場するのは、述べたように、慶曆二年、梅堯臣四一歳の時である。また、宋敏修の名が梅堯臣の作品に初めてあらわれるのはその三年後の慶曆五（一〇四五）年である。二人との付き合いは、おもに汴京で深められた。交友のあった時期の梅堯臣の移動の軌跡を簡単に追うとつぎのようになる。

- ・慶曆二（一〇四二）年 潤州にて裴煜と会う。
- ・慶曆五（一〇四五）年 汴京にて裴・宋と頻繁に往来する。六月、許州に赴任し、裴・宋に見送られる。
- ・慶曆六（一〇四六）年 一時、汴京に戻る。
- ・慶曆七（一〇四七）年 許州の任を解かれ、汴京に戻る。裴煜、河陽幕に赴任し、同年のうちに戻る。
- ・慶曆八（一〇四八）年 揚州、鎮州へ。宋敏修、鄭州へ墓参に。
- ・皇祐元（一〇四九）年 父の死により故郷宣城に戻り喪に服す。
- ・皇祐三（一〇五二）年 喪が明けて汴京に戻る。裴・宋と頻繁に往来。
- ・皇祐五（一〇五三）年 嫡母の死により宣城で服喪。

・至和二（一〇五五）年 喪が明けて汴京に戻る。揚州へ。

・嘉祐元（一〇五六）年 揚州、泗州を経て汴京に戻る。

交友が始まった当初は、複数の友人たちと宴席に名をつらねる程度の付き合いだったが、梅堯臣が地方官赴任や服喪をはさんで汴京にもどるたびに、しだいに友人のなかでも特別な存在に昇格してゆくようにみえる。

裴煜の作品は『全宋詩』に数首おさめられているが、梅堯臣との交友をうかがわせる裴煜の作品は残っていない。『宋詩紀事』卷二六には、「煜 字は如晦、慶曆六年の省元なり。治平中に、開封府提刑を以って蘇州に知たり、判三司都磨勘司に入る」という。慶曆六（一〇四六）年に省元（礼部試の進士第一位）となる裴煜の名が初めて梅堯臣の詩にあらわれたのは、慶曆二年、湖州への赴任前に潤州の舟の中で年越しする梅堯臣を、裴煜が刁繹とともに雨の中を訪れた際の「舟中值雨裴刁二君相與見過」詩がそれである（刁繹のちに梅堯臣の後妻となる刁氏のことである）。しばらく後の「前者裴君雨中見過因以詩謝復承來章輒依韻奉和」詩は、そのときの様子を描写した作（部分）。

前日至朱方、前日 朱方に至り、

正值春雨起。正に春雨の起こるに値う。

君時冒雨來、君 時に雨を冒して來たり、

曾不避泥滓。曾すなわち泥滓を避けず。

林枝滴衣襟、林枝 衣襟に滴り、

沙岸平履齒。沙岸 履齒を平らかにす。

相歡了無間、相歡 了ついでたりに間無し、  
偶論通遠旨。 偶論 遠旨 通ず。

「春雨」のなか、「君」は「泥滓」に汚れるのもいとわずにやってきた。「林枝」からしたたる水に「衣襟」は濡れ、「沙岸」の砂粒によって「履」の「齒」がすり減るありさまだった。「相歡了無間」、ともに楽しみくつろぎ、まったくへだたりを感じなかった。梅堯臣のこれ以前の詩には裴煜の名は見えず、彼らはこの時が初対面か、それに近い間柄だったかと思われる。

いっぽう、宋敏修は字を中道といい、趙州平棘の人で、慶曆三（一〇四三）年に進士出身を賜り、官職は都官郎中にまで至った。<sup>(4)</sup> 宋敏修の名が初めて梅詩にあらわれるのはこの詩の三年後の慶曆五（一〇四五）年である。兄の宋敏求（字は次道）とともに、「元夕同次道中道平叔如晦賦詩得閑字」詩にその名が登場する。詩題に裴煜の名もみえ、元宵節の夜を裴・宋とともにすごしたことがうかがえる。

六月、梅堯臣は都汴京を離れ、許州の簽書判官の任につく。都を離れるまで、裴・宋を含む友人たちと往来をかさねた。裴・宋ともに名がみえる作品には「次道約食後同敏叔中道平叔如晦詣景德浴以風埃遂止」詩があり、裴煜のみのものには「和裴如晦雨中過其亡兄易居」詩、「雨中宿謝胥裴三君書堂」詩、「答裴送序意」詩、「答裴如晦」詩があり、宋敏修のみのものには「和中道雨樹」詩、「答中道小疾見寄」詩、「和中道雨中見寄」詩、「和中道伏日次韻」詩、「寄宋次道中道」詩、「寄宋中道」詩がある。

梅堯臣が裴煜におのれの詩作に寄せる矜持と抱負、いわば文学観を披歴する「答裴送序意」詩を挙げておきたい。この年には梅堯臣はまた、「諭烏」「夢登河漢」「靈烏後賦」など、政局を風刺する作品をたてつづけに制作している。

たとえば、許州への出立直後に作られた「夢登河漢」詩は、梅堯臣が夢の中で、「牛」「女」「斗」がそれぞれの自分の能力を発揮できていないことを「神官」に訴える内容であるが、朱東潤氏の『梅堯臣傳』によると、『詩経』「小雅・大東」の影響がみられ、当時の政治状況にたいする問題提起の作であるという。時局を風刺する作品を危惧して、裴煜が「意」を「序」べたことにたいする梅堯臣の返答がこの「答裴送序意」詩である。

我欲之許子有贈、 我 許に之かんと欲するに 子 贈る有り、  
爲我爲學勿所偏。 我が爲に學を爲し 偏る所勿かれと。

誠知子心苦愛我、 誠に知る 子、心に苦だ我を愛し、

欲我文字無不全。 我が文字をして全からざる無からしめんと欲するを。

居常見我足吟詠、 居常 我を吟詠するに足ると見るも、

乃以述作爲不然。 乃ち述作を以て然らずと爲す。

始曰子知今則否、 始めは子知れりと曰うも 今は則ち否なり、

固亦未能無論焉。 固より亦 未だ論す無きあたわず。

我於詩言豈徒爾、 我 詩に言うは 豈に徒爾ならんや、

因事激風成小篇、 激風を事とするに因りて 小篇を成す

辭雖淺陋頗剋苦、 辭 淺陋と雖も 頗る剋苦す、

未到二雅未忍捐。 未だ二雅に到らざるも 未だ捐つるに忍びず。

安取唐季二三子、 安くんぞ取らん 唐季の二三子の、

區區物象磨窮年。 區區たる物象 窮年を磨くを。

苦苦著書豈無意、 苦苦として書を著す 豈に意無からんや、

貧希祿廩塵俗牽、 貧 祿廩を希い 塵俗に牽かる、

書辭辯說多碌碌、 書辭 辯說 多く碌碌たり、

吾敢虚語同後先。 吾 敢えて語を虚しくし 後先を同じうす。

唯當稍稍緝銘誌、 唯 當に稍稍 銘誌を緝つむぎ、

願以直法書諸賢、 願に直法を以て諸賢を書くべし、

恐子未論我此意、 子の未だ我の此の意を論らざるを恐れ、

把筆慨歎臨長川。 筆を把りて慨歎し 長川に臨む。

私が許州に行くにあたって、君からことばを贈られた。自分のために学問をせよ、偏つてはならないと。君が私を心から愛し、私の文学を完璧なものにさせたいと願つてくれることがよく分かる。普段から君は私には詩才があるとみなしてくれていたのに、私の作品が偏つていると否定的なのだ。はじめは私をよく理解してくれていると思つていたが、今はそうではない。もとより諷論のないものではないけななのだ。私は詩で無駄口をたたかない。つよい風刺に専念してこそ作品となる。ことばは浅薄ではあるがそれなりに苦心したもの。「詩経」の「大雅」「小雅」には及ばないが打ち捨てるには忍びない。唐末の一部の詩人のように、取るにたらぬ物象をとりあげて一生涯をすり減らすことなどどうしてできよう。苦しみにぬいて著作するのに思想を籠めずいられようか。貧しさから禄米をこいねがい俗世に繋がれ、つむぎだすことばは平凡なものが多いが、私はあえて典故をもちいず前後をいっしょくたにする。ただ少しづつ墓誌銘を綴る、率直な表現によつて賢人たちのことを書き記そう。君にはたぶんまだ

私のこの気持ちはわからないだろう。筆をとって長い川に向かい慨歎する。

詩題の人名には「裴」としか記されていないが、夏敬観氏や朱東潤氏が指摘するように、「裴」の下にはおそらく脱字があり、裴煜を指しているよう。「我が爲に學を爲し 偏る所勿かれ」。裴煜は梅堯臣に、學問に専念するよう忠告した。それは、梅堯臣の諷刺性のない詩が、彼の立場を悪くすることを危惧したためである。先に述べたように、梅堯臣は諧諷を好む詩人であるとともに、河豚の詩で知られるように強い諷刺性をもつ。裴煜の忠告は『詩経』の「二雅」のような「激風」（諷諭）こそが「文字」（文学）の根底にあるべきだとの梅堯臣の信念と対立するものであり、梅堯臣はそれが友をおもふ裴煜の情であることを承知のうえで、あえて詩作に寄せる矜持と抱負を述べる。最後に「子の未だ我の此の意を論らざるを恐れ」、これだけ言っても君にはわからないだろう、と「慨歎」するのは、裴煜が友の身を案じる友情に厚い人物であることを、知っているからこそである。相手が梅堯臣の文学を解さぬ凡庸な人物にすぎなければ、その後の生涯にわたる深い交友はありえなかつた。

同時期には、宋敏修にむけても、詩に対する抱負や矜持を披歴しているのは偶然であろうか。「答中道小疾見寄」詩（卷一五）。体調を崩した宋敏修から寄せられた詩に答えた詩である。

嵇康性彌嬾、 嵇康 性 彌いよよ嬾なるも、

曾不廢養生、 曾て養生を廢さず、

子姑當妙年、 子 姑しぼらく妙年に當るも、

何乃勞其精。 何なん乃ぞ其の精を勞れしむるや。

老聃有至論、老聃 至論 有り

身孰親於名、身 孰くんぞ名より親しからざる、

詩本道情性、詩は本と 情性を道い、

不須大厥聲、厥の聲を大にするを須いず。

方聞理平淡、方に理の平淡なるを聞くべし、

昏曉在淵明、昏曉 淵明に在り、

寢欲來於夢、寢 夢に來たらんと欲し、

食欲來於羹、食 羹に來たらんと欲す。

淵明儻有靈、淵明 儻し靈有らば、

爲子氣不平、子の爲に 氣 平らかならざらん。

其人實傲佚、其の人 實に傲佚、

不喜子纏縈、子の纏縈せらるるを喜はず。

吾今敢告子、吾 今 敢えて子に告ぐ、

幸願少適情、幸願わくは 少く情に適わんことを、

時能與子飲、時に能く子と與に飲み、

莫惜倒餅罌、餅罌を倒すを惜しむ莫れ。

嵇康は不精者だったが、長寿を得るための養生をおろそかにしたことはなかった。君はまだ若いのに、どうしてよくよ悩むのか。老子に卓説がある。身体が名声より大切ではない人がいるものか。詩は本来、真情を吐露す

るものであるが、声を大にする必要はない。理の平淡なのがよい。私は朝も夜も陶淵明に親しんでいる。眠っているときは夢に出てきそうなほどで、食事のときには羹にあらわれそうなくらいだ。もし陶淵明の霊がいたら、君のために穏やかな気持ちにならぬだろう。かの人はまことに遊び楽しむ方であるから、君ががんじがらめになっている様は面白くないだろう。あえて申し上げたいが、どうぞしばらくは気ままに過ごささい。時には君とともに酒を飲みたい。酒樽を傾けるのを惜しんではなりませんぞ。

冒頭の二句は、嵇康が「養生論」を著したことを指す。「養生論」のなかで嵇康は、神仙の「千餘歳」の寿命を「獲」るべく、呼吸法や食事、服薬、精神療法について論じている。第五、六句は『老子』第四四章のことは「名と身と孰れか親しき」、名声と身体とどちらが大切か（身体である）、をふまえている。この詩の「身孰親於名」は字面通りに読むと、「身体がどうして名声よりも大事であろうか」と、老子の「至論」とは真逆の意味になってしまう。文脈に合うよう、ここでは否定形として解釈した。「平淡」は、裏を返せば前出の「答裴送序意」詩における「淺陋」なる「辭」であり、「直法」である。裴煜には政治批判をたしなめられたので、「二雅」（大雅・小雅）のごとき諷諭がおのれの文学の理想像であると言明した。病のために「纏紮がんじがらめ」になっている宋敏修にたいしては、「傲佚じゆうきまつ」たる陶淵明を引き合いに出して、「適情」、おのれの気持ちに率直に生きるよう勧める。裴・宋にあたえたこの二詩の共通点として、梅堯臣は、（政治状況や病などの）外的要因によっておのれの「意」「情」を押し殺そうとする裴・宋の現状を批判し、自由におのれの「意」「情」を文学に表出することを宣言かつ奨励している。

宋敏修や裴煜の生卒年は未詳だが、この詩で「子しほら 姑こ妙年に當る」と述べている。「妙年」の友をもつ梅堯臣は当時四四歳である。梅堯臣最晩年の五七歳のときに宋敏修にたいして、「子 淹廻すと雖も 年 且に壮たらんとす」

(君はなかなか出世できないが、まだ壮年なのだ)<sup>8</sup>と慰めており、「壯」は三〇代を指すので、梅堯臣より二〇歳程度若いかと思われる。また、裴煜は慶曆七(一〇四七)年、梅堯臣四六歳の時の詩に「新婚 復た新婚」<sup>9</sup>と新婚を冷やかされているので、やはり梅堯臣よりも十歳以上若かつたのではないか。

宋敏修についての記述は『宋詩紀事』にはみえないが、「子 素より文字を樂しむ」(和宋中道喜至次用其韻)詩(卷二一)と梅堯臣が記し、宋敏修に唱和した詩も散見する。裴煜は慶曆七(一〇四七)年に河陽幕に赴任して同年のうち帰京し、同じく都に戻った梅堯臣と再会を果たした。そのとき、「萬里」のかなたから戻った裴煜はおのれの二百篇の詩を『萬里集』と名付けて梅堯臣にみせる。梅堯臣は「讀裴如晦萬里集書其後」詩のなかで、「定應まぎに前人を倅たづるべし、未だ嘗て踏襲 有らず」と前人を踏襲しない彼の詩の独自の風格に言及している。注意しておきたいのは「宋子 其の端に序す」と、おそらく宋敏修がその序を書いていることである。知り合った当初は複数の友人のひとりとしてつきあっていたのが、この時期には年配の梅堯臣を若い裴煜・宋敏修が囲み、三人で小さな文人グループを形成していたことがうかがえる。

## 二 裴・宋を夢にみる詩

梅堯臣には友人や知人を夢に見て作った詩が数首ある。欧陽脩(卷二)・公度(いとこ。卷八)・故府錢公(錢惟演。卷八)・亡妻謝氏(卷二六)・鄭戢(卷二六)・尹師魯(尹洙。卷二八)・韓仲文(韓綜。卷一八)・裴煜(卷一八)・宋次道(卷二〇)・蔡君謨(卷二四)・宋敏修(卷二四)である(傍線の人物は故人)。このなかに期せずして裴・宋が含まれている。裴煜を夢に見た詩は慶曆八(一〇四八)年、梅堯臣は揚州を経て陳州に鎮安軍節度判官

として赴任したときである。宋敏修を夢に見た詩は、至和元（一〇五四）年、故郷宣城にて嫡母の喪に服していたと  
きのことである。ふたつの夢の詩の間には六年の開きがある。どちらの場合も、離れた場所に暮らしている友を夢に  
見たという点で一致している。

「九月二日夢後寄裴如晦」詩（卷一八）

裴生安健否、裴生 安健なるや否や、

試問雁經過、試みに問う 雁 經過せしかと、

處士賦鸚鵡、處士 鸚鵡を賦し、

將軍養駱駝、將軍 駱駝を養う。

食魚今飽未、魚を食らいて 今飽さしや未だしや、

索米奈貧何、米を求めて 貧を奈何せん、

昨夜分明夢、昨夜 分明なる夢、

持書認篆窠、書を持して篆窠を認む。

裴さん、お元気ですか。手紙はお手元に届きましたか（君からの返信はまだこない）。禰衡處士は黄祖の酒席で  
たちどころに鸚鵡の賦をつくり、梁懂將軍は勝利によって数万頭の駱駝を手に入れた。君は魚で満腹なさってま  
すか。私は米にもこと欠く貧乏暮らし。昨夜は鮮やかな夢をみました。君からの手紙が届いた夢ですが、その印刻  
のあととはつきり覚えていますよ。

梅堯臣が裴煜の夢をみたのは、最初の妻謝氏、尹洙、韓綜ら故人がたてつづけに夢にあらわれた時期である。とくに謝氏の夢ではともに「雲母山」に登つて遊んだが「忽ち覺むれば皆 已に非なり、空庭 日 方に午」<sup>10</sup>、目覚めたときには「皆已非」とむなしさだけが残った。「安健」であろう裴煜を夢にみた詩では、そのような悲嘆は当然ながらない。梅堯臣はこの年、揚州を経て鎮安軍節度判官として陳州に赴任しており、いっぽう裴煜は二年前に省元（礼部試の進士第一位）となり、一時は河陽に出たものの、おそらくこのときは都汴京にいたのではないか。

後漢の欄衡は黄祖の宴席に献上された鸚鵡を見て、即座に「鸚鵡賦」（『文選』卷一三）をつくつた。「駱駝」を「養」う「將軍」とは、『後漢書』にみえる梁懂のことか。梁懂は戦勝により、「駱駝畜産數萬頭」を「獲」たという。欄衡と梁懂の故事によせて、文学の完遂と富貴を裴煜が手に入れたことを言祝いでいる。だが、この詩の三年後の「貸米於如晦」詩では「大貧 小貧に丐う」といい、米を借りる自分を「大貧」とするばかりか、貸す裴煜をも「小貧」としている。梅堯臣にはこのように裴煜をからかう傾向があり、魚を食べ飽きた裴煜と米にもこと欠くおのれとを対比させることで、省元の裴煜をからかっている可能性もある。

「夢後得宋中道書」詩（原注：四月十九日。）（卷二四）

宵夢宋子語、宵に夢む 宋子の語、

晝得宋子書、晝に得たり 宋子の書、

書意與夢語、書意と夢語と、

曾不異往初。曾ち往初に異ならず。

昔我遭家難、昔 我は家難に遭い、

逢子亦在廬、子に逢えば亦廬に在り。

我南君大梁、我は南君は大梁、

千里非隔疎、千里隔疎に非ず。

念處天地中、念うに天地の中に處り、

天地猶一車、天地は猶一車のごとし、

日月爲兩轂、日月は兩轂と爲り、

星辰隨徐徐、星辰は隨いて徐徐たり。

晝夜轉不已、晝夜轉りて已まず、

載之將焉如、之に載りて將に焉いづかにか如かんとす、

冉冉趨死鄉、冉冉死郷に趨く、

萬古曾無餘、萬古曾て餘無し。

其間乃有夢、其の間乃ち夢有り、

覺實夢何虚、覺むれば實にして夢は何ぞ虚なる、

何虚亦何實、何をか虚として亦何をか實とす、

及盡皆同墟、盡くるに及んでは皆同じく墟なり。

身世既若此、身世既に此くの若くなれば、

合離休歎諸、合離諸を歎くを休めよ。

夜、夢のなかで宋君と話していたが、昼になって宋君からの書簡が届いた。書簡に示された思いも夢の中での話

らしいも、昔とかわらない。昔、我が家に不幸が襲い、君と知り合つた当時、君も貧しい庵に住んでいた。今、私は南のかた宣城に、君は都汴京にと別れてはいるが、千里離れていても遠いと思えません。いずれにしても天地のうち、天地はひとつの車のようなもの、日月は車軸をおおう轂こしであり、星はそれに従つてゆるゆると進む。昼も夜も回つて止むことがない。この車に乗つてどこへ行こうというのか。じわじわと死郷に近づいている。はるか昔から死から逃れられたとはいはない。生死の間には夢がある。目覚めれば実であり、夢はなんと虚であることか。何を虚といふ何を実とするのか。命が尽きればみな同じく荒地となる。人生とはこのようなものだから、いっしょにしようと別れていようと歎くことはあるまい。

夢は生と死の「間」にあり、死者との交流が可能な異空間であり、また遠くの生者の便りを距離を超えて届ける異空間でもある。この二詩からも推測できようが、生きている人の夢を見るのは、その人からの便りを得られる予兆であると梅堯臣は信じている。たとえば、歐陽脩と嵩山に遊ぶ夢を見たときは、そのあと実際に歐陽脩から手紙が届き、謝希深（名は絳。梅の最初の妻謝氏の兄）のお伴をして嵩山に遊んだことを知らされた。<sup>12</sup> 宋敏修を夢みた詩では、「夢」のなかの「宋子語」と、そのあとで届いた「宋子書」から、「往初」（昔）と変わらぬ宋敏修の姿をみとめる。宋敏修はおそらく書簡のなかで、梅堯臣と離れていることの寂しさを「歎」いたのであろう。梅堯臣は、「天地」を「一車」になぞらえて、「千里」のへだたりを「隔疎に非ず」となだめ、さらに生死の間に「夢」があるとして、「虚」と「實」はどちらも確実なものではないとする。夢（虚）と現実（實）が錯綜する展開としては、たとえば『列子』「周穆王篇」の鹿を得る故事や、『莊子』「齊物篇」の胡蝶の夢の故事などにみえる。梅堯臣は、「天地」の「一車」のなかで昼夜を「轉」ろうが、いずれ「餘」すことなくみな「冉冉趨死郷」「及盡皆同墟」となるのだから人の生は

限りあるもの、嘆いても仕方ない、と詩を結ぶ。夢から万物の変化に思いを馳せる展開は、たとえば李白の「古風詩其九」にもみえるが、胡蝶の夢の故事から詠いおこして万物の「變易」を説く李白の結論は、「富貴 故と此くの如し、營營 何の求むる所ぞ」と、「富貴」のうつろいやすさに集約され、出世を求めてあくせくするより、今この時を楽しもうという前向きな態度をみせる。梅堯臣が「歎くを休めよ」となだめる結びに類似の態度を見て取ることも可能ではあるが、みないつか死ぬのだと繰り返し述べるところに、彼の死生観もみてとれる。それは、嫡母の服喪中の詩であるがゆえに、いつそうとぎすまされた死生観なのかもしれない。二〇歳も年下の若い宋敏修にたいしては、梅堯臣はときおり教え諭すような立場をとる。

### 三 裴・宋を懐う詩

裴・宋二人の名が詩題に掲げられた詩は二首ある。「依韻解中道如晦嘲」詩と「月下懷裴如晦宋中道」詩（ともに卷二二）で、ともに皇祐三（一〇五二）年、梅堯臣五〇歳の作である。前々年に亡くなった父の喪が明け、二月に故郷宣城を離れ、五月には都汴京に到着し、九月に同進士出身を賜り、太常博士となる。慶曆・皇祐年間、数度の赴任や服喪が明けて汴京に戻るたびに、汴京の友人との交友がさかんにおこなわれる。裴煜・宋敏修との交友も例外ではない。とくに「月下懷裴如晦宋中道」詩は特徴的である。が、まずは「依韻解中道如晦嘲」詩をみてみたい。

「依韻解中道如晦嘲」詩は、朱東潤氏の『梅堯臣集編年校注』には収録されているが、朱氏は「詩見殘宋本、他本皆無」（この詩は殘宋本に見えるだけで、ほかの本には収録されていない）と述べる。

「依韻解中道如晦嘲」詩

二君嗜學者、二君 學を嗜む者、

不啻食飲貪、啻に食飲の貪なるのみならず、

所得纔半語、得る所は纔かに半語なるも、

已實猶雙南。已に實に 猶 雙南のごとし。

推予當獨歩、予を推して 當に獨歩すべし、

幸勿辭再三、幸わくは辭 再三ならしむ勿れ、

可因憤悻發、憤悻に因りて發す可けんや、

莫爲頑鄙談。頑鄙の談を爲す莫れ。

大雅固自到、大雅 固自り到れり、

建安殊未甘、建安 殊に未だ甘からず、

哀哉彼屈宋、哀しい哉 彼の屈宋、

徒爾死湘潭。徒爾いたづらに湘潭に死せり。

險句孰敢抗、險句 孰くんぞ敢えて抗あげんや、

似入虎穴探、虎穴に入りて探すに似たり、

辛勤不盈檐、辛勤 檐に盈たず、

況又劇采藍、況んや又 劇しく藍を采るをや。

誹訶蝟毛起、誹訶 蝟毛 起ち、

度量牛鼎函、 度量 牛鼎 函いれる、

人情何多嫉、 人情 何ぞ嫉多からんや、

機巧久已諳。 機巧 久しく已に諳そんず。

莫問冠冕貴、 問う莫れ 冠冕 貴きを、

自將詩書就、 自ら詩書を將て就ふけり、

興來聊詠懷、 興來 聊か詠懷す、

字密如排蠶。 字密なること排蠶の如し。

曹劉爲我駕、 曹劉 我が駕と爲り、

顏鮑爲我驂、 顏鮑 我が驂と爲る、

爰視二子才、 爰こゝに二子の才を視る、

並驅應亦堪。 並び驅け 應に亦堪うべし。

裴・宋の二君は學問を嗜むお方であり、飲食に貪欲なだけではないのだ。學問によって得たのはほんの少しのことばであるが、黄金のようにたつとい。私をおしのけてひとり歩きをしてください。どうか同じことを何度も言わせないでほしい。分かりそうで分からず、言えそうで言えずにわくわくもぐもぐする状態になって初めて教える孔子は言ったが、君たちに対して私はそんなことはない。愚かで浅はかなことを言わないでほしい。私は「大雅」にはもとより到達しているし、建安の七子をとくべつによいとは思わない。気の毒なのはかの屈原・宋玉のこと、湘・潭にて無駄死にすることになったとは。難しいことばをどうしてあえて掲げる必要がある。虎穴に入つて虎児を探すようなものだ。苦勞して藍を集めても衣のすそにも満たない。ましてや一氣呵成に集めても同じことだ。

そしりとがめる局面はハリネズミの毛のようにしょつちゆう起ち、度量は牛の入る函のように大きい。人の感情はなんと嫉みぶかいことか。策略をめぐらされることはとうの昔から知り尽くしている。高官の冠を貰いなどとは思わぬこと。私は『詩経』『書経』を読みふけり、興が起これば想いを詠み、並んだ蚕のようにびっしりと文字を書きつらねる。曹植、劉楨をわが車馬とし、顔延之、鮑照をわが添え馬としよう。まあ君たち二人には才能があるう、二人で並んで走ればまあ馬車馬には使えよう。

裴・宋の二人が梅堯臣をからかう詩がさききにあり、梅堯臣はその詩の韻に「依」って「解嘲」、応酬した詩である。文学論を展開しているようにみえるが、相手をからかうことに主眼がある。冒頭、「嗜學者」と持ち上げておいて、飲み食いばかりが能じゃないのだ、と突き落とす。得たことばは「半語」のみ、というのも褒め言葉になっていない。「雙南」の「南」を朱東潤氏は固有名詞とするが、よくわからない。ここでは「雙南金」(黄金)の略語として解釈した。「憤排」は『論語』「述而篇」にみえることば。「憤せずんば啓せず、排せずんば發せず」。朱熹の注に「憤は、心通じるを求めて未だ之の意を得ず、排は口に言わんと欲するも未だ之の貌を能くせざるなり」。金谷治氏によると、「(わかりそうでわからず) わくわくしているのでなければ指導しない。(言えそうで言えず) 口をもぐもぐさせているのでなければ、はつきり教えない」という意味。「頑鄙」は「老子」を出典とする。梅堯臣は「大雅固自到」と言うが、かつて六年前の詩に、「未だ二雅に到らざるも未だ捐つるに忍びず」(「答裴送序意」詩。前出)と当の裴煜に語り、「大雅」の「激風」(つよい風刺。「答裴送序意」詩)に「到」ることが梅堯臣の目標であることは裴煜も承知している。「固自到」は、お互いそれを承知のうえで広げた大風呂敷なのである。「不盈檐」「采藍」は、『詩経』「小雅・采緑」をふまえる。「終朝に藍を采るも、一檐に盈たず」。夜明けから朝食まで藍摘みをするが、衣のすそにも

満たない、という意。梅堯臣は、だからといって一気呵成に摘んでも満ちるわけがない、とおどける。「牛鼎函」は『淮南子』「詮言訓」にみえることば。「牛」を「函」<sup>い</sup>れるほどの大きさをもつ「鼎」のこと。こうして牛やら虫やらを並べて喩えるところが梅堯臣らしい。最後に曹劉、顔鮑とそれぞれ並称されるいにしえの文学者を馬車の二頭立ての馬におとしめ、目の前にいる裴・宋の「二子」をもその「才」からやはり馬車馬におとしめる。

文学論に似て、かつて裴・宋をたしなめたときの口調とは異なる。気安い間柄なればこそその軽口である。二人にたいするその気安さを、梅堯臣は同年に制作した別の詩において、角度を変えてつぎのように表現している。

「月下懷裴如晦宋中道」詩（卷二一）

九陌無人行、 九陌 人の行く無く、

寒月淨如水、 寒月 淨きこと水の如し、

洗然天宇空、 洗然たり 天宇の空、

玉井東南起。 玉井 東南に起こる。

我馬臥我庭、 我が馬は我が庭に臥し、

帖帖垂頸耳、 帖帖 頸耳を垂る、

霜花滿黑鬣、 霜花 黒鬣に滿ち、

安欲致千里。 安くんぞ千里を致すを欲せんや。

我僕寢我厩、 我が僕は我が厩に寝ね、

相背肖兩已、 相い背きて兩已に肖たり、

夜深忽驚魘、  
夜深く 忽ち驚魘し、

呼若中流失。  
呼ぶこと流失に中るが若し。

是時興我懷、  
是の時 我が懷 興り、

顧影行月底、  
影を顧みて月底を行き、

唯影與月光、  
唯 影と月光と、

舉止無猜毀。  
舉止 猜毀する無し。

吾交有裴宋、  
吾が交に 裴宋 有り、

心意月影比、  
心意 月影に比ぶ、

尋常同語默、  
尋常 語默を同にし、

肯問世俗子。  
肯えて世の俗子に問わんや。

都の大通りには人の行き来はなく、寒々とした月が水のように清らかである。大空は洗ったように澄みわたり、玉井の星座が東南にあらわれた。私の馬は庭で寝ており、首も耳もぐったりと垂れた状態。黒いたてがみには白い霜が積もり、千里を走ろうという気概はなさげだ。私の下僕は厩舎に眠り、背中合わせになって「己」の字をふたつ合わせたような格好で寝ていたが、深夜に突然悪夢にうなされ、流れ矢に当たったかのようにあつと叫んだ。このとき、私はふと感慨がわきおこり、自分の影をふりかえて月光のもとを歩いた。その場には影と月光のみ、私に逆らいそしめることもなく、行動をとにもする。私の友人に裴如晦と宋中道がいるが、その心だては月と影にたとえられる。ふだんから話をするのも黙るのも息が合い、世の中の俗人どもなど相手にすまい。

冒頭、静かな冬の夜のひと気のない大通りと、家の者が寝静まった様子をえがく。「兩已」はもとは『書経』「益稷」の孔安国の注にみえることば。「𦏧は兩已の相い背くを為す」、古代の礼服の文様が「已」の字を背中合わせにした形であったことをいう。『書経』に典拠をもつ格式ある文様を、この詩では厩舎で眠る下僕の寝姿にたとえ、また、ぐったり眠り込む庭の駄馬の寝姿には、一日千里を走る力強さが窺えぬとからかい、この家のあるじ梅堯臣のあたたかいまなごしを感じさせる。悪夢にうなされる下僕が夜の静寂のなかに放った叫び声を聞き、いまこの時間に起きているのは自分だけだと気がつく梅堯臣。ふと「懷」が「興」り、「月」と「影」とともに散歩をする。起きているのは自分と「月」と「影」の三者となった。「唯 影と月光と、舉止 猜毀する無し」。「影」と「月光」が自分につき従い、三者にて興をほしのままにするところは、李白の「月下獨酌詩 其一」をほうふつさせる。

花間一壺酒、 花間 一壺の酒、

獨酌無相親。 獨酌 相い親しむ無し。

舉杯邀明月、 杯を舉げて明月を邀え、

對影成三人。 影に對して三人と成る。

月既不解飲、 月は既に飲むを解せず、

影徒隨我身。 影は徒らに我が身に隨う。

暫伴月將影、 暫く月と影とを伴い、

行樂須及春。 行樂 須らく春に及ぶべし。

我歌月徘徊、 我歌えば 月 徘徊し、

我舞影零亂。 影 零亂す

醒時同交歡、 醒むる時は 同に交歡し、

醉後各分散。 酔いて後は 各おの分散す。

永結無情遊、 永えに無情の遊を結び、

相期邈雲漢。 相二期して 雲漢 はるか 邈なり。

「相い親し」む相手をもとめて、「月」と「影」とともに「歌」い「舞」う李白。飲酒の楽しみがわからぬ「無情」の「月」と「影」であるから、酒がまわると、「交歡」はおわる。「永」えに「無情遊」を「結」んだとはいえ、飲酒が主題の詩であり、「月」や「影」との交歡は、「醒」時のみの一時的なまじわりにすぎない。李白は依然、「獨」りである。

それになりたいし、梅堯臣の場合は、「舉止」をとにもする「月」と「影」の「心意」から、「無情」ならぬ有情の友人「裴宋」を想い起こす。「語黙」は、語ることと黙ること。「易」「繫辭上」にみえる。「君子の道は、或いは出で或いは處り、或いは黙し或いは語る」。裴・宋とは、話すときも黙つておるときも息が合う、気のおけない間柄であり、「俗子」とはこうはいかない、と結ぶ。

梅堯臣の「月」と「影」のごとき二友は、「君子」の高潔さにおいて梅堯臣と「同語黙」であっただけでなく、ふざけるときにも息のあったところをみせている。李白の「我歌えば 月 徘徊し、我舞えば 影 零亂す」は、梅堯臣の「語黙を同じうす」に相当しようが、李白の場合、「我」の「歌」「舞」に反応して「月」「影」が「徘徊」「零亂」

した。李白は「獨」りであるから、主体は「我」であり、「我」を中心に「月」「影」がまわっていた。「月」「影」とたわむれたあとは相変わらず「獨」りで酒を飲む李白とはことなり、梅堯臣は家族が寝静まった家で一人、「月」「影」のごとき「心意」をもつ親友二人を「懐」い、「俗子」とは一線を画する自分たちの「君子」ぶりを再認識する。梅堯臣は「獨」りであって「獨」りではない。梅堯臣にとって、「月」と「影」はおのれを「猜毀」することのない友を象徴する。彼がほかの友人を「月」「影」にたとえた作品は、管見では見当たらなかった。風月を風月として、そのままに鑑賞するにとどまらず、それに実在の友人をかさねあわせる。「我」を「猜毀」することのない「月」「影」から、「猜毀」することなく「同語黙」、おのれの分身のような友人、裴煜と宋敏修を「懐」い起こした。

注

- (1) 「送宋中道太傅倅廣平」詩。宋敏修を送別する詩であるが、梅堯臣の原注に、「裴如晦 時に亦 吳江に宰たり」と裴煜の名を挙げる。
- (2) 「乙酉六月二十一日予應辟許昌京師内外之規則有刁氏昆弟蔡氏子予之二季友人則胥平叔宋中道裴如晦各攜肴酒送我于王氏之園盡權而去明日予作詩以寄焉」詩。
- (3) 「與裴如晦二通 其一」(『歐陽脩全集』卷一五二)は梅堯臣の没した嘉祐五年に裴煜に送られた手紙で、「聖俞の賻助、遂に獲ること幾何ぞ」(梅堯臣の葬儀費用のカンパはどれくらい集まりましたか)という。
- (4) 『宋人傳記資料索引』(鼎文書局 民国七五年)による。

- (5) 梅堯臣が都を離れる際には裴・宋らに見送られた。「乙酉六月二十一日予應辟許昌京師内外之親則有刁氏昆弟蔡氏子予之二季友人則胥平叔宋中道裴如晦各攜肴酒送我于王氏之園盡歡而去明日予作詩以寄焉」詩、「送胥裴二子洄馬上作」詩にみえる。
- (6) 原注に「六月二十九日」と記されている。
- (7) 中華書局 一九七九年。
- (8) 「次韻和宋中道再寄」詩。嘉祐三（一〇五八）年、卷二八。
- (9) 「裴如晦自河陽至同韓玉汝謁之」詩。卷一七。
- (10) 「丙戌五月二十二日晝寢夢亡妻謝氏同在江上早行忽逢岸次大山遂往遊陟予賦百餘言述所觀物狀及寤尚記句有共登雲母山不得同宮處倣像夢中意續以成篇」詩。卷一六。
- (11) 拙論「梅堯臣の贈受品詩」（『中唐文学會報』第八号 二〇〇一年）
- (12) 「河陽秋夕夢與永叔遊嵩避雨於峻極賦詩及覺猶能憶記俄而僕夫自洛來云永叔諸君陪希深祠岳因足成短韻」詩。天聖一〇（一〇三二）年、梅堯臣三二歳、卷一。
- (13) 『論語』岩波文庫